

変わる日本の「暮らし」と「まち」

illustration: Shigeyuki Sakata

平成世代と昭和世代では、どう変わった？ まちと住まいへの意識の違いを大調査

平成世代と昭和世代の暮らし意識調査

(2019年・平成31年)

阿部民子

text by Tanko Abe



「令和」の時代を迎えて、早3か月。昭和から平成、そして令和へ。生まれ育った時代によって、人々の考えや価値観はどう変わるのか？ 住まいや地域との関わり、暮らしへの意識の違いはある？

そんな興味深いアンケートを行ったのが、UR都市機構だ。広報室の橋亜希は、「平成元年生まれは今年ちょうど30歳。よく、若年層と高齢者層という区切りが出てきますが、1ジェネレーションとしてちょうどいい年代になります。そこで世代間のギャップがどうな

のか、親御さん世代に若い世代の考えを知ってもらうためにも、改元という機会にアンケートを行ったら面白いのではないかと、企画しました」とその狙いを語る。

平成と昭和の差が浮き彫りに

アンケートを行ったのは、改元直前の2月。16歳から29歳の平成に生まれた世代と、30歳から59歳の昭和に生まれた世代、男女計1000名が対象だ。ここでは、前者を平成世代、後者を昭和世代と分類してみた。

世代が80.3%と、8%も高い数字に。さらに「仲介手数料・更新料の金額」に関しても、平成が21.0%と、昭和の15.7%を凌駕。不景気な時代に生まれ育った環境から、お金にシビアで堅実な平成

世代の姿が浮かび上がってくる。もう一つ、平成世代の堅実さを表すのが「住んでいる地域に、どんなシェアサービスを求めるか」という質問。「畑」「高齢者見守り」「介護」といった、年代的に現実性の高い問題への関心が高くなっている昭和世代に比べ、平成

世代は「住宅」「カメラなど趣味用品」「衣服」などで昭和世代の2倍以上に。余計なものを持たないシンプル暮らし、お金をかけないで楽しむ合理的な考え方やシェアを通してゆるく人と繋がるライフスタイルが見てとれる。

Q1「都会と田舎のどちらに住みたいか」の回答でも意外な結果が出た。平成世代は都会派が多いかと思いきや、都会派は両世代ともに約半数。それに対し、田舎派は昭和世代の35.6%を、平成世代が38.5%と上回る結果に。ネット環境の充実やサテライトオフ

イスの増加などで、どこでも仕事ができるからかもしれない。一方、Q2「自分が住むまちを決める場合、どんな点を重視するか」では、回答が大きく異なっ

た。昭和世代では「買い物環境が充実」「治安」「医療サービスの充実」が上位だが、平成世代は「職場・学校の近く」が最多。通勤などに時間をかけず、自分の時間やプライベートを大切にしている傾向を感じさせる。また、「友人の近く」という回答も多く、核家族化で、遠くの家族や親せきより、近くの友人を頼りにしている人も多い様子だ。

まちで暮らすときに不可欠なコミュニケーションに関しては、どうだろう。Q3「あなたは、今住んでいる地域で家族以外の人々と何らかの「関わり」をもっているならそれはどのような「関わり」ですか」との質問には、両世代とも50%以上が「ある」と回答。どのような関わりか」という問いかけでは、「近所（挨拶程度）」が両世代ともに最多だが、「立ち話程度」では、昭和世代56.2%に対して、平成世代は32.7%。挨拶以上、立ち話未満の「軽い関わり」方が、平成スタイルのご近所づきあいのようなようだ。

両世代ともに、「関わりがない理由は」では「地域の人と知り合う機会がない」が最多。だが、「今後、住んでいる地域のどんな関わりに参加したいか」との質問では、平成世代は「ボランティア活動」「国際交流」「清掃・リサイクル活動」で昭和世代を上回る結果に。東日本大震災などの若者のボランティア参加を見ても、関わり方からわからないだけで、きっかけさえあれば地域社会に関わりたい、いまどきの若者の姿も垣間見える。

時代につれてまちも変わる

治安や医療サービスが充実したまちに住み、介護や高齢者見守りサービスなど年代的に現実性の高い問題に関心を寄せる昭和世代。職住接近でプライベートな時間を大切に、シェアサービスなどでゆるやかな繋がりを求める平成世代。アンケートで浮き彫りになったのは、時代や年齢の変化とともに、人々がまちや住まいに求めるものの変遷だ。

